

著者は受難物語をペトロと共に「あなたこそメシア・キリストです」と告白する自分の共同体を視野に置き、マルコ福音書の表現を少しずつ変えて記しています。今日の箇所はイエスの受難予告第一回です。イエスが受難を予告したとはイエスにとって受難と十字架の死は予定外のことではなかったということです。「必ず……ことになっている」とは神さまの計画であるということを表している言葉です。原始教会にとって、イエスが挫折と思える十字架での死をとげたという事実は解決すべき疑問となっていました。しかし、「必ず……ことになっている」はこの問題に対する一つの答えであったのです。

受難予告を聞いたペトロはすぐにイエスをわきに連れ出して諫め始めます。このペトロの姿をイエスの言葉を受け入れない不信仰と理解するのは正確ではありません。ペトロはイエスへの愛、信仰のゆえに言っているのです。それに対して、イエスは「神のことを思わず、人間のことを思っている」と言いました。イエスが神の子キリストであるなら、イエスが苦しみを受け、殺されるなどということはあるはずがないし、あってはならない、それは神の子キリストであることと矛盾する、というペトロの思いは人間が信仰において思うことです。しかし神さま自身はイエスの受難、十字架の死、復活を通して、救いの業、自らの計画を成し遂げようとしているのです。神さまを信頼するとはこの神さまの心を受け止めることですが、私たちはしばしば自分が神さまとはこういう方だ、救いとはこういうものであるはずだと思い、その思いを信仰と錯覚してしまうのです。

ところで、イエスはペトロに「サタン、引き下がれ」と言いました。この言葉は誘惑物語のイエスの言葉「退け、サタン」と同じです。直訳では、「サタン、引き下がれ」は「退け、私の後ろに、サタンよ」、「退け、サタン」は「行け、サタンよ」となり、「サタン、引き下がれ」には「私の後ろに」という言葉がつけ加えられています。また、「私の後ろに」という言葉はイエスがペトロたちを弟子として招いた時の言葉、「わたしについて来なさい。」にも出ています。「ついて来なさい」は直訳すれば「従いなさい、私の後ろに」です。ペトロはこの「私の後ろに」という言葉にイエスの自分に対する拒絶ではなく、むしろ原点に立ち返れという招きを聴き取ったのではかと思うのです。24節の「わたしについて来たい者は」の直訳は「私の後ろについて来ようと望む者は」となり、24節はイエスの後ろにつき、従っていく弟子たちのあるべき姿を示している言葉なのです。弟子とは、信仰者とは、自分の思いや願いによってイエスを理解しようとするをやめて、イエスが示すことを常に聞き、それに従っていく者となることなのです。